

NORTHERN OWLS



1992/1

北海道立美術館
学芸員研究協議会

3

談輪

美術館への道

平成三年九月、帯広に美術館に通ずる道ができた。能勢真美がよく描いたという緑ヶ丘の樹林に包まれ、アンティークな街路灯に誘導される、なだらかな坂道は赤いレンガで敷き詰められていた。美の世界へいざなう道である。明治十五年というから今から百年以上も前に依田勉三が晩成社を結成して、十勝野に切り開いた道とともに、十勝の人達の心の中に刻まれた二本の太い道のように思える。

美術館の開館を記念するフランス19世紀絵画展では、帯広を中心に実に四万人を超える人達がこの道を歩いた。

「わが町に美術館ができたのだ」静かにのぼる人達の顔には何とも言えない誇りと期待のようなものがある。そして、美術館を後にする人達は、同じ坂道を、ほとんどが

多くを語らず、ゆつくりとした歩調で、時には深く息を吸いこみながら下りていく。まるで、今しがた得た感動から覚めやらぬかのよう。

このような人達にすれ違う度に、私は、あの頃のとした喜びを感じるのであった。そして思い出すのである。「歩み入るものにやすらぎを、去り行く人に幸せを」という東山魁夷の言葉を。これは決して美術館の道を情景にしたものではないが、何故か私の心から離れない。

この美術館に入る人達には、日々の疲れも、時間も、そして自分さえも忘れ、心のやすらぎを得られる場になりたい。そしてこの館から立ち去る人達には、何とも言えない、あの頃のとした感動と幸福がにじみ出てくるような、そんな美術館でありたい。

ほんのたままた「美術館人」となったものの、たわごに過ぎないとは知りながらも、ひたすらそう願っているのである。

(帯広美術館長・室田浩志)

発行信・受信信

▼平成三年度の道美学芸員協議会が、去る十二月二十一日に開催された。参加者は二十一名。その内容については、当会報第四号で特集し、さらに四年度の総会終了後、合わせて記録集を発行する予定。ここではとりあえず、参加できなかった会員や他の美術館人に概略をお伝えしたい。

▼まず「作品保存、修復」の講話。講師は創形美術学校修復研究所長歌田真介氏。新しい作品ほど「丈夫」であるという一般的な考えになんら信憑性がないことを知らされた。むしろ明治の絵画のほうが技術的にしつかりとして絵具の付きも強靱である。大正以降、芸術至上主義のために、そうした技術は二の次となっている。

▼研究協議「ハイビジョンシステムの導入」。近美の構想が中心テーマとなっていたが、実はこの直前、道の情報管理課の構想とバツティンダしていることが判った。中途半端な導入は失敗に帰するだけであり現実的な調整が望まれる。

▼「日頃の問題点等」の協議では、作品寄付申し入れの対応等六項目について話しあわれた。なかでも旭川美の常展新設にともなう諸問題は、各館に共通するテーマだけに今後も協議が必要とされた。

▼「研究発表」は新明氏の「アイヌ絵」と大熊氏の「戦前期の日本の抽象絵画」。前者は玉石混合の多くの作品に接したうえで、その語彙や範囲についても深く検討を加えた。後者は失われた作品も数多く資料としてとりあげ、意欲的かつ多角的に抽象絵画の展開を捉えようとしていた。

各館便り



帯広駅でのフロクターージュ

（帯広美術館）
開館してはや三ヶ月が過ぎようとしている。開館記念のフランス絵画展では三万九千人近くの観覧者があり、休日などは押し寄せるという感じの観客に発券も、売店も、喫茶も対応におおわらわという状態であった。

またこの展覧会と平行して岡部昌生氏を招き、帯広市内各所で公開共同制作を実施、館外でも開館記念事業を展開した。こちらは三百人を超える市民が参加して二百メートルの巨大なフロクターージュ作品を制作、一時期帯広市内では、「フロクターージュ」という言葉が流行語になるほどであった。

現在は二本目の江戸のプリントアート展を開催中。フランス展に比べかなり観覧者数は落ち込んでいるものの、十二月十五日現在で約一万八千人と道単の展覧会としてはまずまず健闘している。この展覧会に来る人々の数が、あるいは帯広美術館の将来を占うことになるのかもしれない。

(佐藤幸宏)

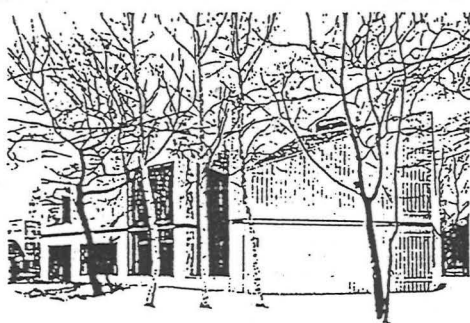
（三岸美術館）

今年も数日を残すのみとなった。いよいよ冬本番である。寒冷の候、他館の皆様はいかがお過ごしだろうか。

さて、当館の観覧者数の動向も冬の季節を迎えている。雪の積もった知事公館の庭の眺めはなかなか風情もあり、この時期の観覧者は都会の喧噪とは無縁に鑑賞ができるのだが、館としてはいささかさびしい。毎年木々の葉が落ち小雪が舞いはじめると十一月下旬頃から年明けにかけては、観覧者もぐっともすくなくなる。日照時間と比較はしていないが、月別に見るなら十一月までに比べて十二月、一月がかなり落ちこみ、二月、三月に回復していくというのがここ数年の動向である。

この冬期間の落ち込みには種々の理由がある。きちんと分析もせずに、あれこれはいえないが、冬だからしかたがないではすまされないことと思う。館の特色ともあわせて考えるなら季節による差のないほうが望ましい。そのために何が必要なのか考えてみたい。

(地家光二)



冬の三岸美術館外景

（函館美術館）

開館五周年記念展「蝦夷波響とその時代展」が、当館で八月九月に開催された後、福島、兵庫と巡回していたが、十二月の七日より、いよいよ最終会場である東京の板橋区立美術館ではじまった（一月十二日まで）。

まだみていない方は是非、東京で御覧いただきたい。

この展覧会の作品借用については、山種美術館の草薙さんからは「無節操な借用依頼」とお叱りをうけたが、実際の展示は、前半と後半の二会場ずつで大幅な作品の入れ替えをおこなっており、作品によっては、一会場のみ展示も多く、保存・管理には十分な注意を払っていることも、念のためお伝えしておきたいと思う。

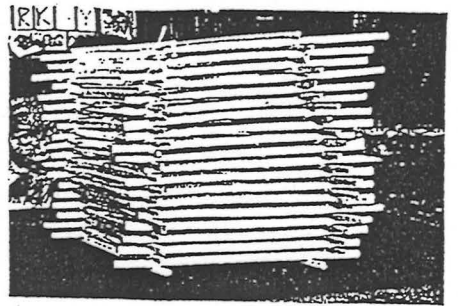
それにしても、美術作品の保存と展示の問題は、それぞれが相反するベクトルを向いているがゆえに、その調整は大変難しいと改めて感じさせられた。

地元、道南は松前の画人を紹介する地域発信のこの展覧会は当館で全国巡回の幹事館の役割も担っているの、各巡回展が全てつつがなく終わった後、全国の所蔵家に大切な作品をお返しして、はじめて終了したということになる。

(中塚宏行)



「狎鉄線花園」



「ちびっこ美術館」工作物

〈旭川美術館〉

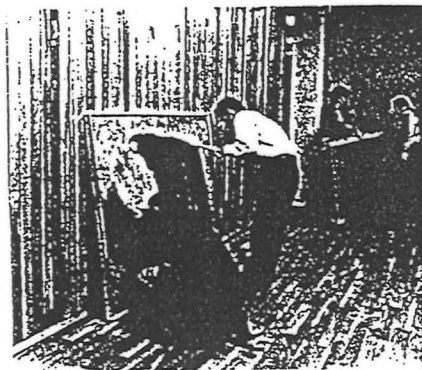
はこ、箱、ハコ、函——。積木の箱、箱男、オブジェの箱、ただの箱、変な箱——「はこ」にもいろいろある。

脳裏からしばらく箱のことが離れなかった。夢でも箱が空から落ちてきた。十二月六日に「はこ展」の作家選定委員会が終ると、それらの幻想は頭から去っていった。これで来年の展覧会の骨子が一つ固まったのである。一安心。

それが終わると、忘年会の時期に突入した。ボランティアと合同で、館全員で、学芸課だけで、etc——。しかし残念ながら、今年のことを忘れると、来年の展覧会が出来ない。気の緩む時期だが、ひきしめていく。

閑話休題。ET氏は現在「彫刻と写真」のテーマで調査研究に没頭中。SY氏は来年早々にある工作教室用の模型を机上に置き、構想を練っている。筆者はそろそろ二年後の展覧会事業案をまとめていかなくてはならない。一同課題を整理して良い年を迎えたいものである。(十二月十五日)

(新明英仁)



返却作品のテクニック作業

(井内佳津恵)

〈近代美術館〉

十一月二十四日をもって「近代日本画の花鳥」が好評の内に終了し、この原稿を書いている現在、年明けオープンの子どもと親の美術館の準備に三名の担当が追われている。テーマは「絵画の東西」。昨年の展示終了と図録納品は喜れも押し迫った三十日であったが、果たして今年の成り行きは如何?

親子展の担当者はさておき、他の本年度の特別展事業は一段落したことになる。そこで日常の業務について動向の一端を記してみよう。十二月は、新年オープンの展覧会を控えて作品の貸出・返却が集中し、収蔵庫の出入りが激しくなる。その合間に撮影、特別観覧、修復などがあり「収蔵庫使用予定表」は、みるみるうちにうまっていくな。こうした交錯する状況の中では、勢い、予定をこなしていくことに精一杯となりがちであるが、それだけに作品を管理する際の基本原則、注意事項を最確認することが必要となる。美術館活動の基本的な業務であることを肝に銘じながら取り組みたい。(十二月十六日)

〈音楽〉

ワークショップ workshop

近年、各地の美術館で、ワークショップという言葉が盛んに使われ始めた。もともと主に手工業を行う「工房」「作業場」のことを指したワークショップは、現在では仕事や研究などを一定期間行う「研究集会」の一形態として、企業や団体、学術機関などでの共同研究に実施させることが多い。集団で創造的成果を求める時に有効な方法であり、参加者の自主性と自由な交流を図りながら、参加体験型の共同作業が行われる。建築家ハルプリンが提唱した都市計画のためのワークショップに典型的なように、参加者を通じて地域社会との関係を積極的に推進する試みである。

いま、各地の美術館がワークショップに着目しているのも、まさにこの点であるが、しかしその内容はさまざま。従来の造形教室などの発展タイプ、講義式を改めた対話型集会、市民グループの共同制作、作家の公開制作などのほか、住民の創作活動の一環に位置付けたり、教育普及活動の総称として考える動きもある。近美の子供を対象としたワークショップや帯美で行われた岡部昌生氏と市民の共同制作などは、体験的な理解を目指す取組みといえる。美術館を単なる鑑賞・学習の場から解放するワークショップの実施を通して、新しい社会的機能を持った美術館像が、各地で探られているのである。

(寺嶋弘道)

考えの小窓

学芸員としての作口

近年、作品の借用、貸出しの件数が急増している。それにとともに、学芸的業務処理のみならず、展示、梱包、輸送を含めた作品の保管についても気を配らなければならない。こうした昨今の作品貸借の傾向は、自主企画展の増加や道内の美術館との作品交流が活発になってきたことなどの理由による。むろん作品の有効的活用という面では、一般的にいうと歓迎すべきことではある。しかし、それには作品の扱いや保管のうえで、学芸員の適切な対応や責任が必ず付随することを忘

れてはならぬだろう。当然のこととして、作品の貸借には展示一括保険等の処置がなされ、美術専門業者による梱包、輸送などの作業が実質的に進められる。しかし、作品の状況を正確に把握し、その扱いや梱包、輸送、展示の各方法を現場で指示するのは、なによりもまず学芸員なのである。つまり学芸員は、一連の作業の責任者であり、監督者であるといえる。よい。したがって、この点で不手際があれば保険による措置はできても、館や学芸員の信用が失墜するのは必然である。美術館どうしのお付き合いは、この信用のうえに成り立っていると

移動展などで、学芸員が一人で対応しなければならぬ時は、なおさらこの点に留意しなければならない。万が一事故があった時の対応も事前に考慮すべきだろう。その基本は現状を的確に把握して、すみやかに担当チーム等に報告し、独断による処理は避けることである。そこに誤りがあれば、その後の作品修復などの具体的処理に多大な影響を及ぼしかねないのである。これらはあくまでも学芸員の行う基本的事項である。しかし実際には、さまざまなケースごとに遂行していくのは難しい。ともあれ、学芸員は常に作品とともにあるのだということを、改めて心に銘記したいものだ。

(佐藤友哉)

近況・心境

旭川に赴任して、早くも二度目の冬。去年は暖冬に恵まれたが、今年は、厳冬の旭川を経験できそうである。ストロブを増やそうかなど、つい思案してしまふ。日本画の展覧会と箱展の選定会議の準備に終われ、ようやく一段落、と思つたら一九九一年もあとわずか。年内にあげることにしている原稿のことを考えると、カレンダーを一枚もとに戻したくなり、月日のたつのが加速度的に早くなっている気がする今日この頃である。ふと机の上ののっている工作「各館便り」(参照)に目がとまり、前回額に汗して工作制作に励んだ親子を思い出した。あれだけ熱心に展覧会を鑑賞し

てくれれば、と人の姿の少なくなった展示室を歩きながら考えた。(十二月十四日)

◇学芸員になって丸三年を迎えようとしている。諸先輩方の活躍ぶりを見るにつけ、はたして自分にやっていた三年のかばかりを考えていた三年であったが、最近肩から力が抜けてきたように思う。今は自信の有無を問うよりも、とにかく目の前の仕事をかたづけなくてはならない。毎日を送っている。本人の頼りない内面とは裏腹に、はたからは余裕があるように見えるのである。先日も課長に「もう十年くらいいるような貫禄」と言われてしまった。貫禄は仕事ぶりではなく、ひとえに体重がかもし出しているように思う。そう言えば、体調の良かったこの夏に、私は六キロも太ってしまったのであった。

(十二月十五日)

(穂積利明)

◇明けましておめでとうございませう。十二月末までの発行予定が年を越してしまい、「各館便り」「近況・心境」がその趣旨からいって、時機を逸した感があり申しわけない。ご多用にもかかわらず原稿をいただいたのに恐縮至極である。◇今年には近美と三岸美が開館十五周年、旭川美が十周年にあたる。そして現道立美術館全体では実に四十七年になる。約半世紀、これは単なる足し算ではない。各館は点として存在しているのではない。全道的視野にたつて各館の活動の理念、基本方針が決められ今日に至っているのだ。その意味では共同体であり、四十七年はこの共同体の歴史を物語る。◇この共同体を支える「核」の一つとして道美学芸研が存在しなければならぬと思う。今年も一層の協力、連携を願います。